二〇一〇年八月一七日（参加者一九名）

旅の宿娘とおそろひの色浴衣　こすもす
砂浜に足なとられそスイカ割る　〃
電柱が邪魔をしてをる遠花火　〃
頭だけ見ゆるヒマワリ畑かな　〃
菜園のキュウリ曲がりしまま太る　小袖
去ぬ燕天文台に集合す　〃
大夕立門跡かたく閉じしまま　〃
話したきことの山程盆の月　宏虎
新涼や飛沫窓うつ高速艇　〃
チャリティーの演奏ミサの椅子涼し　つくし
水際の石を洗ひて磯涼し　〃
棚田揺る色なき風のさはさはと　明日香
片方の翅ややくづれ秋の蝶　〃
渋滞を縫ふ盆僧のバイクかな　うつぎ
藷の蔓煮て父母の終戦日　〃
新涼の水琴窟に耳澄ます　ひかり
束の間の信号待ちも片陰へ　〃
ひるがへる葉の裏白き野分かな　せいじ
夏山に記念切手を買ひにけり　〃

夏山の売店銀座繁盛す　ひろみ
山頂にはためく旗は氷菓子　〃
山荘の銀座通りを避暑散歩　有香
風涼し水郷巡る櫂の音　〃
渋滞の高速道路盆の月　きづな
門前の広き寺領田蓮の花　〃
法被着て踊りの輪へと恙なし　満天
右手左手萩の綴りし磴のぼる　〃
海峡に霧笛しきりの朝かな　わかば
鉄棒の子にさかさまや雲の峰　よし子
細格子続く花街秋しぐれ　菜々
六道の辻へ標や秋暑し　はく子
動く歩道残暑の街を貫ける　〃

定例句会みのる選

二〇一〇年八月一七日（参加者一九名）